

# 源氏物語

紅葉賀

紫式部

青空文庫



青海の波しづかなるさまを舞ふ若き心

は下に鳴れども

(晶子)

朱雀院すざくの行幸は十月の十幾日ということになっていた。その日の歌舞の演奏はことに選よりすぐって行なわれるという評判であったから、後こうきゆう宮の人々はそれが御所でなくて陪観のできないことを残念がっていた。帝みかども藤壺ふじつぼの女御にようごにお見せになることのできないことを遺憾おほしめに思召して、当日と同じことを試楽として御前でやらせて御覧になった。

源氏の中將は青海波せいがいはを舞ったのである。二人舞の相手は左大

臣家の頭とうのちゆうじょう中將ちゆうじやうだった。人よりはすぐれた風采ふうさいのこの公子も、源氏のそばで見では桜に隣みよまった深山の木というより言い方がない。夕方前のさつと明るくなつた日光のもとで青海波は舞われたのである。地をする音楽もことに冴さえて聞こえた。同じ舞ながらも面おもてづかい、足の踏み方などのみごとさに、ほかでも舞う青海波とは全然別な感じであつた。舞い手が歌うところなどは、極楽の迦陵頻伽かりようびんがの声と聞かれた。源氏の舞の巧妙さに帝は御落涙あそばされた。陪席した高官たちも親王方も同様である。歌が終わつて袖そでが下へおろされると、待ち受けたようににぎわしく起こる楽音に舞い手の頬ほおが染まつて常よりもまた光る君と見えた。東宮の母君の女御は舞い手の美しさを認識しながらも心が平らかでな

かつたのである。

「神様があの美貌びぼうに見入ってどうかなさらないかと思われるね、

気味の悪い」

こんなことを言うのを、若い女房などは情けなく思つて聞いた。

藤壺の宮は自分にやましい心がなかつたらまして美しく見える舞であろうと見ながらも夢のような気があそばされた。その夜の宿直とといの女御はこの宮であつた。

「今日の試楽は青海波が王だったね。どう思いましたか」

宮はお返辞がしにくくて、

「特別に結構でございました」

とだけ。

「もう一人のほうも悪くないようだった。曲の意味の表現とか、手づかいとかに貴公子の舞はよいところがある。専門家の名人はじょうず上手であつても、無邪気なえん艶な趣をよう見せないよ。こんなに試楽の日に皆見てしまつては朱雀院のもみじ紅葉の日の興味がよほど薄くなると思つたが、あなたに見せたかつたからね」  
など仰せになつた。

翌朝源氏は藤壺の宮へ手紙を送つた。

どう御覧くださいましたか。苦しい思いに心を乱しながらでした。

物思ふに立ち舞ふべくもあらぬ身の袖うち振りし心知りきや

失礼をお許してください。

とあつた。目にくらむほど美しかった昨日の舞を無視すること  
がおできにならなかつたのか、宮はお書きになつた。

から人の袖ふることは遠けれど起<sup>た</sup>ち居<sup>み</sup>につけて哀れとは見き

一観衆として。

たまさかに得た短い返事も、受けた源氏にとっては非常な幸福  
であつた。支<sup>し</sup>那<sup>な</sup>における青海波の曲の起源なども知つて作られた  
歌であることから、もう十分に后<sup>きさき</sup>らしい見識を備えていられると

源氏は微笑して、手紙を仏の経卷のように拈ひろげて見入っていた。

行幸の日は親王方も公卿くぎようもあるだけの人が帝の供奉ぐぶをした。

必ずあるはずの奏楽の船がこの日も池を漕こぎまわり、唐の曲も高こ

麗うらいうらの曲も舞われて盛んな宴えん賀がだった。試楽の日の源氏の舞い姿

のあまりに美しかったことが魔障ましようの耽美たんび心しんをそそりはしな

ったかと帝は御心配になつて、寺々で経をお読ませになつたりし

たことを聞く人も、御親子の情はそうあることと思つたが、東宮

の母君の女御だけはあまりな御関心ぶりだとねたんでいた。楽人

は殿上役人からも地下じげからもすぐれた技倆を認められている人た

ちだけが選より整えられたのである。参議が二人、それから左衛門さえもん

督のかみ、右衛門督が左右の樂を監督した。舞い手はめいめい今日



まで良師を選んでした稽古けいこの成果をここで見せたわけである。四十人の楽人が吹き立てた楽音に誘われて吹く松の風はほんとうの深山みやまおろしのようなであつた。いろいろの秋の紅葉もみじの散りかう中へ青海波の舞い手が歩み出た時には、これ以上の美は地上にないであらうと見えた。挿かざしにした紅葉が風のために葉数の少なくなつたのを見て、左大将がそばへ寄つて庭前の菊を折つてさし変えた。日暮れ前になつてさつと時雨しぐれがした。空もこの絶妙な舞い手に心を動かされたように。

美貌の源氏が紫を染め出したころの白菊かむりを冠さに挿さして、今日は試楽の日に超こえて細かな手までもおろそかにしない舞振りを見せた。終わりにちよつと引き返して来て舞うところなどでは、人が

皆清い寒気をさえ覚え、人間界のこととは思われなかつた。物の価値のわからぬ下人げにんで、木の蔭かげや岩の蔭、もしくは落ち葉の中にうずもれるようにして見ていた者さえも、少し賢い者は涙をこぼしていた。承香じょうきやうでん殿の女御を母にした第四親王がまだ童形ようぎやうで秋風楽をお舞いになつたのがそれに続いての見物みものだつた。この二つがよかつた。あとの何の舞も人の興味を惹ひかなかつた。ないほうがよかつたかもしれない。今夜源氏は従三位じゆさんみから正三位に上つた。頭中将は正四位下が上になつた。他の高官たちにも波及して昇進するものが多いのである。当然これも源氏の恩であることを皆知つていた。この世でこんな人を楽しぜんごうぶしうる源氏は前生ぜんしやうですばらしい善業ぜんごうがあつたのであろう。

それがあつてから藤壺の宮は宮中から実家へお帰りになつた。逢う機会をとらえようとして、源氏は宮邸の訪問にばかりかかずらつていて、左大臣家の夫人もあまり訪わなかつた。その上紫の姫君を迎えてからは、二条の院へ新たな人を入れたと伝えた者があつて、夫人の心はいつそう恨めしかつた。真相を知らないのであるから恨んでいるのがもつともであるが、正直に普通の人のように口へ出して恨めば自分も事実を話して、自分の心持ちを説明もし慰めもできるのであるが、一人でいろいろな<sup>そんたく</sup>忖度をして恨んでいるという態度がいやで、自分はいほかの<sup>うわき</sup>人に浮気な心が寄つていくのである。とにかく完全な女で、欠点といつては何もない、だれよりもいちばん最初に結婚した妻であるから、どんな

に心の中では尊重しているかしのれない、それがわからない間はま  
だしかたがない。将来はきつと自分の思うような妻になしうるだ  
ろうと源氏は思つて、その人が少しのことで源氏から離れるよう  
な軽率な行爲に出ない性格であることも源氏は信じて疑わなかつ  
たのである。永久に結ばれた夫婦としてその人を思う愛にはまた  
特別なものがあつた。

若紫は馴なれていくにしたがつて、性質のよさも容よう貌ぼうの美も源  
氏の心を多く惹ひいた。姫君は無邪気によく源氏を愛していた。家  
の者にも何なに人びとであるか知らずまいとして、今も初めの西たいの対たいを  
住居すまいにさせて、そこに華麗な設備をば加え、自身も始終こちらに  
来ていて若い女に王よを教育におしていくことに力を入れているのであ

る。手本を書いて習わせなどもして、今までよそにいた娘を呼び寄せた善良な父のようになっていた。事務の扱い所を作り、家司けいしも別に命じて貴族生活をするのに何の不足も感じさせなかつた。しかもこれみつ惟光以外の者は西の対の主の何なにびと人であるかをいぶかしく思っていた。女王は今も時々は尼君を恋しがって泣くのである。源氏のいる間は紛れていたが、夜などまれにここで泊まることはあつても、通う家が多くて日が暮れると出かけるのを、悲しがつて泣いたりするおりがあるのを源氏はかわいく思っていた。二、三日御所において、そのまま左大臣家へ行つていたりする時は若紫がまつたくめいり込んでしまつているので、母親のない子を持つている気がして、恋人を見に行つても落ち着かぬ心になつている

のである。僧都そうずはこうした報告を受けて、不思議に思いながらもうれしかつた。尼君の法事の北山の寺であつた時も源氏は厚く布施せを贈つた。

藤壺ふじつぼの宮の自邸である三条の宮へ、様子を知りたさに源氏が行くと王命婦おうみよめ、中納言の君、中務なかつかきなどという女房が出て応接した。源氏はよそよそしい扱いをされることに不平であつたが自分をおさえながらただの話をしていゝる時に兵部卿ひょうぶきょうの宮がおいでになつた。源氏が来ていると聞いてこちらの座敷へおいでになつた。貴人らしい、そして艶えんな風流男とお見えになる宮を、このまま女にした顔を源氏はかりに考えてみてもそれは美人らしく思へた。藤壺の宮の兄君で、また可憐かれんな若紫の父君であることに

ことさら親しみを覚えて源氏はいろいろな話をしていた。兵部卿の宮もこれまでよりも打ち解けて見える美しい源氏を、婿であるなどとはお知りにならないで、この人を女にしてみたいなどと若々しく考えておいでになった。夜になると兵部卿の宮は女御の宮のお座敷のほうへはいっておしまいになった。源氏はうらやましくて、昔は陛下が愛子としてよく藤壺の御簾みすの中へ自分をお入れになり、今日のように取り次ぎが中に立つ話ではなしに、宮口ずからのお話が伺えたものであると思うと、今の宮が恨めしかった。「たびたび伺うはずですが、参っても御用がないと自然怠なまけることになります。命じてくださることがありましたら、御遠慮なく言っておつかわしくございましたら満足です」

などと堅い挨拶あいさつをして源氏は帰って行つた。王命婦も策動のしようがなかつた。宮のお気持ちをそれとなく観察してみても、自分の運命の陥擠かんせいであるものはこの恋である、源氏を忘れないことは自分を滅ぼす道であるということを通して過去よりもまた強く思つておいでになる御様子であつたから手が出ないのである。はかない恋であると消極的に悲しむ人は藤壺の宮であつて、積極的に思いつめている人は源氏の君であつた。

少納言は思ひのほかの幸福が小女王の運命に現われてきたことを、死んだ尼君が絶え間ない祈願に愛孫のことを言つて仏にすがつたその効験ききめであろうと思うのであつたが、権力の強い左大臣家に第一の夫人があることであるし、そこかしこに愛人を持つ源氏



であることを思うと、真実の結婚を見るころになつて面倒めんどうが多くなり、姫君に苦勞が始まるのではないかと恐れていた。しかしこれには特異性がある。少女の日にすでにこんなに愛している源氏であるから将来もたのもしいわけであると見えた。母方の祖母の喪は三か月であつたから、師走しわすの三十日に喪服を替えさせた。母代わりをしていた祖母であつたから除喪のあとも派手はでにはせず濃くはない紅の色、紫、山吹やまぶきの落ち着いた色などで、そして地質のきわめてよい織物の小桂こうちぎを着た元日の紫の女王は、急に近代的な美人になつたようである。源氏は宮中の朝拝の式に出かけるところで、ちよつと西の対へ寄つた。

「今日からは、もう大人になりましたか」

と笑顔えがおをして源氏は言った。光源氏の美しいことはいうまでもない。紫の君はもう雛ひなを出して遊びに夢中であつた。三尺の据すえだ棚な二つにいろいろな小道具を置いて、またそのほかに小さく作った家などを幾つも源氏が与えてあつたのを、それらを座敷じゅうに並べて遊んでいるのである。

「雛追なやらいをするといつて犬君いぬぎがこれをこわしましたから、私よくしていますの」

と姫君は言つて、一所懸命になつて小さい家を繕おうとしてい  
る。

「ほんとうにそそつかしい人ですね。すぐ直させてあげますよ。  
今日は縁起を祝う日ですからね、泣いてはいけませんよ」

言い残して出て行く源氏の春の新装を女房たちは縁に近く出て見送っていた。紫の君も同じように見に立つてから、雛人形の中の源氏の君をきれいに装束させて真似まねの参内をさせたりしているのであった。

「もう今年からは少し大人におなりあそばせよ。十歳とおより上の人はお雛様遊びをしてはよくないと世間では申しますのよ。あなた様はもう良人おとがいらつしやる方なんですから、奥様らしく静かにしていらつしやらなくてはなりません。髪をお梳すきするのもおうるさがりになるようなことではね」

などと少納言が言った。遊びにばかり夢中になっているのを恥じさせようとして言ったのであるが、女王は心の中で、私にはも

う良人があるのだから、源氏の君がそうなんだ。少納言などの良人は皆醜い顔をしている、私はあんなに美しい若い人を良人にした、こんなことをはじめて思った。というのも一つ年が加わったせいかもしれない。何ということなしにこうした幼稚さが御簾みすの外まで来る家司けいしや侍たちにも知れてきて、怪しんではいたが、これもまだ名ばかりの夫人であるとは知らなんだ。

源氏は御所から左大臣家のほうへ退出した。例のように夫人からは高いところから多情男を見くだしているというようなよそよそしい態度をとられるのが苦しくて、源氏は、

「せめて今年からでもあなたが暖かい心で私を見てくれるようになったらうれしいと思うのだが」

と言ったが、夫人は、二条の院へある女性が迎えられたということを知ってからは、本邸へ置くほどの人は源氏の最も愛する人で、やがては正夫人として公表するだけの用意がある人であろうとねたんでいた。自尊心の傷つけられていることはもとよりである。しかも何も気づかないふうで、じょうだん戯談を言いかけて行きなごする源氏に負けて、余儀なく返辞をする様子などに魅力がなくなかった。よっつ四歳ほどの年上であることを夫人自身でもきまきまは恥ずかしく思っているが、美の整った女盛りのきじよ貴女であることは源氏も認めているのである。どこに欠点もない妻を持っていて、ただ自分の多情からこの人にうら怨みを負うような愚か者になつていなのだところなふうにも源氏は思った。同じ大臣でも特に大きな

権力者である現代の左大臣が父で、内親王である夫人から生まれ  
た唯一の娘であるから、思い上がった性質にでき上がっていて、  
少しでも敬意の足りない取り扱ひを受けては、許すことができな  
い。帝の愛子として育つた源氏の自負はそれを無視してよいと教  
えた。こんなことが夫妻の溝を作っているものらしい。左大臣も  
二条の院の新夫人の件などがあつて、頼もしくない媚君の心をう  
らめしがりもしていたが、逢えば恨みも何も忘れて源氏を愛した。  
今もあらゆる歓待を尽くすのである。

翌朝源氏が出て行こうとする時に、大臣は装束を着けている源  
氏に、有名な宝物になつている石の帯を自身で持つて来て贈つた。  
正装した源氏の形を見て、後ろのほうを手で引いて直したりなど

大臣はしていた。沓も手で取らないばかりである。娘を思う親心が源氏の心を打った。

「こんないいのは、宮中の詩会があるでしょうから、その時に使いましょう」

と贈り物の帯について言うと、

「それにはまたもつといいのがございます。これはただちよつと珍しいだけの物です」

と言って、大臣はしいてそれを使わせた。この婿君を齋くことかしずに大臣は生きがいを感じていた。たまさかにもせよ婿としてこの人を出入りさせていれば幸福感は十分大臣にあるであろうと見えた。

源氏の参賀の場所は数多くもなかつた。東宮、一院、それから藤壺の三条の宮へ行つた。

「今日はまたことにおきれいに見えますね、年がお行きになればなるほどごりっぱにおなりになる方なんです」

女房たちがこうささやいている時に、宮はわずかな几帳きちようの間から源氏の顔をほのかに見て、お心にはいろいろなことが思われた。御出産のあるべきはずの十二月を過ぎ、この月こそと用意して三条の宮の人々も待ち、帝みかどもすでに、皇子女御出生についてのお心づもりをしておいでになつたが、何ともなくて一月もたつた。物もののけ怪が御出産を遅れさせているのであろうかとも世間で噂うわさをする時、宮のお心は非常に苦しかつた。このことによつて救われな



い悪名を負う人になるのかと、こんな煩悶はんもんをされることが自然  
 おからだにさわってお加減も悪いのであつた。それを聞いても源  
 氏はいろいろと思ひ合わすことがあつて、目だたぬように産婦の  
 宮のために修しゆ法ほうなどをあちこちの寺でさせていた。この間に御  
 病気で宮が亡なくなつておしまいにならぬかという不安が、源氏の  
 心をいつそう暗くさせていたが、二月の十幾日に皇子が御誕生に  
 なつたので、帝も御満足をあそばし、三条の宮の人たちも愁しゆう眉うげ  
 を開いた。なお生きようとする自分の心は未練で恥ずかしいが、  
 弘徽殿こきでんあたりで言う詛のろいの言葉が伝えられている時に自分が死ん  
 でしまつてはみじめな者として笑われるばかりであるから、とそ  
 うお思ひになつた時からつとめて今は死ぬまいと強くおなりにな

つて、御衰弱も少しずつ恢復かいふくしていった。

帝は新皇子を非常に御覧になりたがっておいでになった。人知れぬ父性愛の火に心を燃やしながら源氏は伺候者の少ない隙すきをうかがって行った。

「陛下が若宮にどんなにお逢いになりたがっていらっしやるかもしれません。それで私がまずお目にかかりまして御様子でも申し上げたらよろしいかと思ひます」

と源氏は申し込んだのであるが、

「まだお生まれたての方というものは醜みにくうございますからお見せしたくございません」

という母宮の御挨拶で、お見せにならないのにも理由があつた。

それは若宮のお顔が驚くほど源氏に生き写しであつて、別のものとは決して見えなかつたからである。宮はお心の鬼からこれを苦痛にしておいでになつた。この若宮を見て自分の過失に気づかぬ人はないのであらう、何でもないことも捜し出して人をとがめようとするのが世の中である。どんな悪名を自分は受けることかとお思ひになると、結局不幸な者は自分であると熱い涙がこぼれるのであつた。源氏は稀まれに都合よく王命婦が呼び出された時には、いろいろと言葉を尽くして宮にお逢いさせてくれと頼むのであるが、今はもう何のかいもなかつた。新皇子拝見を望むことに対しては、「なぜそんなにまでおつしやるのでしよう。自然にその日が参るのではございませんか」

と答えていたが、無言で二人が読み合っている心が別にあつた。口で言うべきことではないから、そのほうのことはまた言葉ににくかつた。

「いつまた私たちは直接にお話ができるのだろう」

と言つて泣く源氏が王命婦の目には気の毒でならない。

「いかさまに昔結べる契りにてこの世にかかる中の隔てぞ

わからない、わからない」

とも源氏は言うのである。命婦は宮の御煩悶はんもんをよく知つてい

て、それだけ告げるのが恋の仲介なかだちをした者の義務だと思つた。

「見ても思ふ見ぬはたいかに歎なげくらんこや世の人の惑やみふてふ闇

「どちらも同じほどお気の毒だと思ひます」

と命婦は言つた。取りつき所もないように源氏が悲しんで歸つて行くことも、度が重なれば邸やしきの者も不審を起こしはせぬかと宮は心配しておいでになつて王命婦をも昔ほどお愛しにはならない。目に立つことをはばかつて何ともお言いにはならないが、源氏への同情者として宮のお心では命婦をお憎みになることもあるらしいのを、命婦はわびしく思つていた。意外なことにもなるものであると歎なげかれたであろうと思われる。

四月に若宮は母宮につれられて宮中へおはいりになつた。普通

の乳児ちのみごよりははずつと大きく小児こどもらしくなつておいでになつて、このごろはもうからだを起き返らせるようにもされるのであつた。紛らわしようにもない若宮のお顔つきであつたが、帝には思いも寄らぬことでおありになつて、すぐれた子どろしは似たものであるらしいと思召おほしめした。帝は新皇子をこの上なく御大切にあそばされた。源氏の君を非常に愛しておいでになりながら、東宮にお立てになることは世上の批難を恐れて御実行ができなかつたのを、帝は常に終生の遺憾事に思召して、長じてますます王者らしい風貌うぼうの備わつていくのを御覧になつては心苦しさに堪えないように思召したのであるが、こんな尊貴な女御から同じ美貌の皇子が新しくお生まれになつたのであるから、これこそは瑕きずなき玉であ

ると御寵ちようあい愛になる。女御の宮はそれをまた苦痛に思つておいでになつた。源氏の中将が音楽の遊びなどに参会している時などに帝は抱いておいでになつて、

「私は子供がたくさんあるが、おまえだけをこんなに小さい時から毎日見た。だから同じように思うのかよく似た気がする。小さい間は皆こんなものだろうか」

とお言いになつて、非常にかわいくお思ひになる様子が拝された。源氏は顔の色も変わる気がしておそろしくも、もつたいなくも、うれしくも、身にしむようにもいろいろに思つて涙がこぼれそうだった。ものを言うようになつたころにお口をお動かしになるのが非常にお美しかったから、自分ながらもこの顔に似ていると

いわれる顔は尊重すべきであるとも思った。宮はあまりの片腹痛さに汗を流しておいでになった。源氏は若宮を見て、また予期しない父性愛の心を乱すもののあるのに気がついて退出してしまつた。

源氏は二条の院の東の対たいに帰つて、苦しい胸を休めてから後刻になつて左大臣家へ行こうと思つていた。前の庭の植え込みの中に何木となく、何草となく青くなつていゝる中に、目だつ色を作つて咲いた撫なでしこ子を折つて、それに添える手紙を長く王命婦おうみようぶへ書いた。

よそへつつ見るに心も慰まで露けさまさる撫子の花



花を子のように思つて愛することはついに不可能であることを  
知りました。

とも書かれてあつた。だれも来ぬ隙すきがあつたか命婦はそれを宮  
のお目にかけて、

「ほんの塵ちりほどのこのお返事を書いてくださいませんか。この花は  
片なびらにお書きになるほど、少しばかり」

と申し上げた。宮もしみじみお悲しい時であつた。

袖濡そでぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまと撫子

とだけ、ほのかに、書きつづしのもののように書かれてある紙を、喜びながら命婦は源氏へ送った。例のように返事のないことを予期して、なおも悲しみくずおれている時に宮の御返事が届けられたのである。胸騒ぎがしてこの非常にうれしい時にも源氏の涙は落ちた。

じつと物思いをしながら寝ていることは堪えがたい気がして、例の慰め場所西の対へ行つて見た。少し乱れた髪をそのままにして部屋着のうちかけすがた桂姿で笛を懐しい音ねに吹きながら座敷をのぞくと、紫の女王はさつきの撫子が露にぬれたような可憐かれんなふうで横になつていた。非常に美しい。こぼれるほどの愛あいきよう嬌のある顔が、帰邸した気配けはいがしてからすぐにも出て来なかつた源氏を恨め

しいと思うように向こうに向けられているのである。座敷の端のほうにすわって、

「こちらへいらつしやい」

と言つても素知らぬ顔をしている。「入りぬる磯いその草なれや」  
(みらく少なく恋ふらくの多き)と口ずさんで、袖そでを口もとにあ  
てている様子にかわいい伶俐りこうさが見えるのである。

「つまらない歌を歌っているのですね。始終見ていなければなら  
ないと思うのはよくないことですよ」

源氏は琴を女房に出させて紫の君に弾ひかせようとした。

「十三絃げんの琴は中央の絃いとの調子を高くするのはどうもしつくりと  
しないものだから」

と言つて、柱を平調に下げて掻き合わせだけをして姫君に与え  
ると、もうすねてもいず美しく弾き出した。小さい人が左手を伸  
ばして絃をおさえる手つきを源氏はかわいく思つて、自身は笛を  
吹きながら教えていた。頭がよくてむずかしい調子などもほんの  
一度くらいで習い取つた。何ごとにも貴女らしい素質の見えるの  
に源氏は満足していた。保會呂俱世利といふのは変な名の曲であ  
るが、それをおもしろく笛で源氏が吹くのに、合わせる琴の弾き  
手は小さい人であつたが音の間が違わずに弾けて、上手になる  
手筋と見えるのである。灯を点させてから絵などをいつしよに見  
ていたが、さつき源氏はここへ来る前に出かける用意を命じてあ  
つたから、供をする侍たちが促すように御簾の外から、

「雨が降りそうでございます」

などと言うのを聞くと、紫の君はいつものように心細くなつてめいり込んでいった。絵も見さしてうつむいているのがかわいくて、こぼれかかっている美しい髪をなでてやりながら、

「私がよそに行っている時、あなたは寂しいの」

と言うと女王はうなずいた。

「私だつて一日あなたを見ないでいるともう苦しくなる。けれどもあなたは小さいから私は安心していてね、私が行かないといろいろな意地悪を言っておこる人がありますからね。今のうちはそのほうへ行きます。あなたが大人になれば決してもうよそへは行かない。人からうらまれたくないと思うのも、長く生きていて、あ

なたを幸福にしたいと思うからです」

などどこまごま話して聞かせると、さすがに恥じて返辞もしない。そのまま膝ひざに寄りかかって寝入ってしまったのを見ると、源氏はかわいそうになって、

「もう今夜は出かけないことにする」

と侍たちに言うと、その人らはあちらへ立って行って。間もなく源氏の夕飯が西の対へ運ばれた。源氏は女王を起こして、

「もう行かないことにしましたよ」

と言うと慰んで起きた。そうしていっしょに食事をしたが、姫君はまだはかないようなふうでろくろく食べなかつた。

「ではお寝やすみなさいな」

出ないということは嘘うそでないかと危あぶながつてこんなことを言うのである。こんな可憐かれんな人を置いて行くことは、どんなに恋しい人の所があつてもできないことであると源氏は思った。

こんなふうに取り止められることも多いのを、侍などの中には左大臣家へ伝える者もあつてあちらでは、

「どんな身分の人でしょう。失礼な方ですわね。二条の院へどこのお嬢かたづさんがお嫁かたづきになつたという話もないことだし、そんなふうにごちらへのお出かけを引き止めたり、またよくふざけたりしていらつしやるというのでは、りっぱな御身分の人とは思えないじゃありませんか。御所などで始まつた関係の女房級の人を奥様らしく二条の院へお入れになつて、それを批難さすまいと思ひ

になつて、だれということを秘密にしていらつしやるのですよ。

幼稚な所作が多いのですつて」

などと女房が言つていた。

御所にまで二条の院の新婦の問題が聞こえていった。

「気の毒じゃないか。左大臣が心配しているそうだ。小さいおまえを婿にしてくれて、十二分に尽くした今日までの好意がわからない年でもないのに、なぜその娘を冷淡に扱うのだ」

と陛下がおっしゃつても、源氏はただ恐縮したふうを見せているだけで、何とも御返答をしなかつた。帝は妻がみかど氣に入らないのであるうとかわいそうに思おぼしめ召した。

「格別おまえは放縦な男ではなし、女官や女御たちの女房を情人



にしている噂うわさなどもないのに、どうしてそんな隠し事しゆうとをして舅や妻に恨まれる結果を作るのだろうか」

と仰せられた。帝はもうよい御年配であつたが美女がお好きであつた。采女うねめや女蔵人にょくらうどなども容色のある者が宮廷に歓迎される時代であつた。したがつて美人も宮廷には多かつたが、そんな人たちは源氏さえその気になれば情人な関係を成り立たせることが容易であつたであろうが、源氏は見馴なれているせいかな女官たちへはその意味の好意を見せることは皆無であつたから、怪しがつてわざわざその人たちが戯じようだん談を言いかけることがあつても、源氏はただ冷淡でない程度にあしらつていて、それ以上の交際をしようとしないのを物足らず思う者さえあつた。よほど年のいった典な

いしのすけ

侍で、いい家の出でもあり、才女でもあつて、世間からは相

当にえらく思われていながら、多情な性質であつてその点では人

をひんしゆく聾ひんしゆく 蹙ひんしゆくさせている女があつた。源氏はなぜこう年がいつても

うわき

浮気がやめられないのであろうと不思議な気がして、恋の戯談を

言いかけてみると、不似合いにも思わず相手になつてきた。あさ

ましく思いながらも、さすがに風変わりな衝動を受けてつい源氏

は關係を作つてしまった。噂されてもきまりの悪い不つりあいな

老いた情人であつたから、源氏は人に知らせまいとして、ことさ

ら表面は冷淡にしているのを、女は常に恨んでいた。典侍は帝の

お髪上げぐしあの役を勤めて、それが終わったので、帝はお召めしかえを奉

仕する人をお呼びになつて出てお行きになつた部屋には、ほかの

者がいないで、典侍が常よりも美しい感じの受け取れるふうで、  
 頭の形などに艶えんな所も見え、服装も派手はでにきれいな物を着ている  
 のを見て、いつまでも若作りをするものだと源氏は思いつながらも、  
 どう思っているだろうと知りたい心も動いて、後ろから裳もの裾すそを  
 引いてみた。はなやかな絵をかけた紙の扇で顔を隠すようにしな  
 がら見返った典侍の目は、まぶた瞼を張り切らせようと故意に引き伸ば  
 しているが、黒くなって、深い筋のはいったものであった。妙に  
 似合わない扇だと思つて、自身のに替かえて源典侍げんてんじのを見ると、  
 それは真赤まっかな地に、青で厚く森の色が塗られたものである。横の  
 ほうに若々しくくない字であるが上じょう手に「森の下草こ老いぬれば駒こま  
 もすさめず刈る人もなし」という歌が書かれてある。厭味いやみな恋歌

などは書かずともよいのにと源氏は苦笑しながらも、

「そうじやありませんよ、『大荒木の森こそ夏のかげはしるけれど盛んな夏ですよ』」

こんなことを言う恋の遊戯にも不似合いな相手だと思つと、源氏は人が見ねばよいがとばかり願われた。女はそんなことを思つていない。

君し来こば手馴てなれの駒こまに刈り飼はん盛り過ぎたる下葉なりとも

とても色気たつぷりな表情をして言う。

「笹分けば人や咎めんいつとなく駒馴らすめる森の木隠れ

あなたの所はさしさわりの多いからうっかり行けない」

こう言つて、立つて行こうとする源氏を、典侍は手で留めて、

「私はこんなにまで煩悶はんもんをしたことはありませんよ。すぐ捨て

られてしまうような恋をして一生の恥をここでかくのです」

非常に悲しそうに泣く。

「近いうちに必ず行きます。いつもそう思いながら実行ができな  
いだけですよ」

袖そでを放させて出ようとするのを、典侍はまたもう一度追つて来

て「橋柱」（思ひながらに中や絶えなん）と言いかける所作しよさまで

も、お召めしかえが済んだ帝が襖からかみ子からのぞいておしまいになった。不つり合いな恋人たちであるのを、おかしく思おぼしめ召してお笑いになりながら、帝は、

「まじめ過ぎる恋愛ぎらいだと言っておまえたちの困っている男もやはりそうでなかったね」

と典ないしのすけ侍へお言いになった。典侍はきまり悪さも少し感じた

が、恋しい人のためには濡ぬれぎぬ衣でさえも着たがる者があるのであるから、弁解はしようとしなかった。それ以後御所の人たちが意外な恋としてこの関係を噂うわさした。頭とうのちゆうじょう中将の耳にそれがはい

つて、源氏の隠し事はたいてい正確に察して知っている自分も、まだそれだけは気がつかなんだと思うとともに、自身の好奇心も

起こつてきて、まんまと好色な源典侍の情人の一人になった。この貴公子もざらにある若い男ではなかったから、源氏の飽き足らぬ愛を補う気で関係をしたが、典侍の心に今も恋しくてならない人はただ一人の源氏であつた。困つた多情女である。きわめて秘密にしていたので頭中将との関係を源氏は知らなんだ。御殿で見かけると恨みを告げる典侍に、源氏は老いている点にだけ同情を持ちながらもいやな気持ちがおさえ切れずに長く逢いに行こうともしなかつたが、夕立のしたあとの夏の夜の涼しさに誘われて温うめんめいでん  
明殿あたりを歩いていると、典侍はその一室で琵琶びわを上じょう手うずに弾ひいていた。清涼殿の音楽の御遊びの時、ほかは皆男の殿上役人の中へも加えられて琵琶の役をするほどの名手であつたから、

それが恋に悩みながら弾く絃いとの音ねには源氏の心を打つものがあつた。「瓜うり作りになりやしなまし」という歌を、美声ではなやかに歌つていゝるのには少し反感が起こつた。白樂天が聞いたといふ鄂がくしゅう州の女の琵琶もこうした妙味があつたのであろうと源氏は聞いていたのである。弾きやめて女は物思いに堪えないふうであつた。源氏は御簾みすぎわに寄つて催馬樂さいばらの東屋あずまやを歌つていゝると、「押し開いて来ませ」といふ所を同音で添えた。源氏は勝手の違ちがう気がした。

立ち濡ぬるる人しもあらし東屋にうたてもかかゝる雨そそぎかな



と歌つて女は歎息たんそくをしている。自分だけを対象としているのではなからうが、どうしてそんなに人が待たれるのであろうと源氏は思った。

人妻はあなわづらはし東屋のまやのあまりも馴れなじとぞ思ふ

と言ひ捨てて、源氏は行つてしまいたかつたのであるが、あまりに侮辱したことになると思つて典侍の望んでいたように室内へはいつた。源氏は女と朗らかに戯談じょうだんなどを言い合つていろうちに、こうした境地も悪くない気がしてきた。頭中将は源氏がまじめらしくして、自分の恋愛問題を批難したり、注意を与えたり

することのあるのを口惜くちおしく思つて、素知らぬふうでいて源氏には隠れた恋人が幾人かあるはずであるから、どうかしてそのうちの一つの事実でもつかみたいと常に思つていたが、偶然今夜の会合を来合せて見た。頭中将はうれしくて、こんな機会に少し威お嚇どして、源氏を困惑させて懲りたと言わせたいと思つた。それではかるべく油断を与えておいた。冷ややかに風が吹き通つて夜のふけかかった時分に源氏らが少し寝入ったかと思われる気配けはいを見計らつて、頭中将はそつと室内へはいつて行つた。自嘲じちよう的な思いに眠りなどにははいりきれなかつた源氏は物音にすぐ目をさまして人の近づいて来るのを知つたのである。典侍の古い情人でも男のほうしゆりだゆうが離れたがらないという噂のある修理大夫であろうと

思うと、あの老人にとんでもないふしだらな関係を発見された場合の気まずさを思つて、

「迷惑になりそうだ、私は帰ろう。旦那だんなの来ることは初めからわかつていただろうに、私をごまかして泊まらせたのですね」

と言つて、源氏は直衣のうしだけを手でさげて屏風びょうぶの後ろへはいつた。中将はおかしいのをこらえて源氏が隠れた屏風を前から横へ畳み寄せて騒ぐ。年を取っているが美人型の華奢きゃしゃなからだつきのの典侍が以前にも情人のかち合いに困つた経験があつて、あわてながらも源氏をあとの男がどうしたかと心配して、床の上にすわつて慄ふるえていた。自分であることを気づかれないようにして去ろうと源氏は思つたのであるが、だらしなくなつた姿を直さないで、

冠かむりをゆがめたまま逃げる後ろ姿を思つてみると、恥おこな気がしてそのまま落ち着きを作ろうとした。中将はぜひと自分でなく思わせないければならないと知つて物を言わない。ただ怒おこつたふうをして太刀たちを引き抜くと、

「あなた、あなた」

典侍は頭中将を拝んでいるのである。中将は笑い出しそうでならなかった。平生派手はでに作っている外見は相当な若さに見せる典侍も年は五十七、八で、この場合は見得みえも何も捨てて二十前後はたちの公きん達だちの中にいて気をもんでいる様子は醜態そのものであった。わざわざ恐ろしがらせよう自分でないように見せようとする不自然さがかえつて源氏に真相を教える結果になった。自分と知つて

わざとしていることであると思うと、どうでもなれという気になった。いよいよ頭中将であることがわかるとおかしくなつて、抜いた太刀を持つ肱ひじをとらえてぐつとつねると、中将は見頭みあちわされたことを残念に思いながらも笑つてしまった。

「本気なの、ひどい男だね。ちよつとこの直衣のうしを着るから」と源氏が言つても、中将は直衣を放してくれない。

「じゃ君にも脱がせるよ」

と言つて、中将の帯を引いて解いてから、直衣を脱がせようとする、脱ぐまいと抵抗した。引き合っているうちに縫い目がほころんでしまった。

「包むめる名や洩り出でん引きかはしかくほころぶる中の衣に  
明るみへ出ては困るでしょう」

と中将が言うと、

隠れなきものと知る知る夏衣きたるをうすき心とぞ見る

と源氏も負けてはいないのである。双方ともだらしない姿にな  
って行ってしまった。

源氏は友人に威嚇おどされたことを残念に思いながら宿直所とのいどころで寝  
ていた。驚かされた典侍は翌朝残っていた指貫さしぬきや帯などを持た

せてよこした。

「恨みても云ひがひぞなき立ち重ね引きて帰りし波のなごりに  
悲しんでおります。恋の楼閣のくずれるはずの物がくずれてし  
まいました」

という手紙が添えてあつた。面目なく思うのであろうと源氏は  
なおも不快に昨夜を思い出したが、気をもみ抜いていた女の様子  
にあわれんでやってよいところもあつたので返事を書いた。

荒<sup>あれ</sup>だちし波に心は騒がねどよせけん磯<sup>いそ</sup>をいかが恨みぬ

とだけである。帯は中将の物であつた。自分のよりは少し色が濃いようであると、源氏が昨夜の直衣に合わせて見ている時に、直衣の袖がなくなつてそでいるのに気がついた。なんと**い**うはずかしいことだろう、女をあさる人になればこんなことが始終あるのであろうと源氏は反省した。頭中将の宿直所のほうから、

何よりもまずこれをお綴とじつけになる必要があるでしょう。

と書いて直衣の袖を包んでよこした。どうして取られたのであろうと源氏はくやし**か**つた。中将の帯が自分の手には**い**つてい**な**かつたらこの争いは負けになるのであつた**と**うれ**し**かつた。帯と**同**じ色の紙に包んで、



中絶えばかごとや負ふと危ふさに縹はなだの帯はとりてだに見ず

と書いて源氏は持たせてやった。女の所で解いた帯に他人の手が触れるとその恋は解消してしまうとも言われているのである。  
中将からまた折り返して、

君にかく引き取られぬる帯なればかくて絶えぬる中とかこた  
ん

なんといつても責任がありますよ。

と書いてある。昼近くになつて殿上の詰め所へ二人とも行つた。取り澄ました顔をしてゐる源氏を見ると中將もおかしくてならぬ。その日は自身も蔵人頭くろうどのかみとして公用の多い日であつたから至極まじめな顔を作つていた。しかしどうかした拍子に目が合うと互いにほほえまれるのである。だれもいぬ時に中將がそばへ寄つて来て言つた。

「隠し事には懲りたでしょう」

しりめ尻目で見てゐる。優越感があるようである。

「なあに、それよりもせつかく来ながら無駄だつた人が氣の毒だ。まったくは君やつかいな女だね」

秘密にしようと言ひ合つたが、それからの中將はどれだけあ

の晩の騒ぎを言い出して源氏を苦笑させたかしのれない。それは恋しい女のために受ける罰でもないのである。女は続いて源氏の心を惹ひこうとしていろいろに技巧を用いるのを源氏はうるさがっていた。中将は妹にもその話はせずに、自分だけが源氏を困らせる用に使うほうが有利だと思っていた。よい外戚をお持ちになった親王方も帝みかどの殊しゆちよう寵もうされる源氏には一目置いておいでになるのであるが、この頭中将だけは、負けていないでもよいという自信を持っていた。ことごとくに競争心を見せるのである。左大臣の息むすこ子この中でこの人だけが源氏の夫人と同腹の内親王の母君を持つていた。源氏の君はただ皇子であるという点が違っているだけで、自分も同じ大臣といっても最大の権力のある大臣を父として、皇

女から生まれてきたのである、たいして違わない尊貴さが自分にあると思うものらしい。人物も<sup>れいり</sup>伶俐で何の学問にも通じたりつばな公子であつた。つまりぬ事までも二人は競争して人の話題になることも多いのである。

この七月に皇后の<sup>さくりつ</sup>冊立があるはずであつた。源氏は中将から

参議に上つた。<sup>のほ</sup>帝が近く讓位をあそぼしたい思召<sup>おほしめ</sup>があつて、

<sup>ふじつぼ</sup>藤壺の宮のお生みになつた若宮を東宮にたくお思いになつた

が将来御後援をするのに適当な人がない。母方の御伯父<sup>おじ</sup>は皆親王

で実際の政治に携わることのできないのも不文律になつていたか

ら、母宮をだけでも後の位に<sup>す</sup>据えて置くことが若宮の強味になる

であろうと思召して藤壺の宮を<sup>ちゆうぐう</sup>中宮に擬しておいになつた。

弘徽殿の女御がこれに平<sup>たい</sup>らかでないことに道理はあつた。

「しかし皇太子の即位することはもう近い将来のことなのだから、その時は当然皇太后になりうるあなたなのだから、気をひろくお持ちなさい」

帝はこんなふう<sup>ふう</sup>に女御を慰めておいでになつた。皇太子の母君で、入内して二十幾年になる女御をさしおいて藤壺を后にあそばすことは当を得たことであるいはないかもしれない。例のように世間ではいろいろに言う者があつた。

儀式のあとで御所へおはいりになる新しい中宮のお供を源氏の君もした。后と一口に申し上げても、この方の御身分は后腹の内親王であつた。<sup>まった</sup>全<sup>ま</sup>い宝<sup>た</sup>玉<sup>た</sup>のように輝やくお后と見られたのである。

それに帝の御寵ちようあい愛あいもたいしたものであったから、満廷の官人がこの後に奉仕することを喜んだ。道理のほかまでの好意を持った源氏は、御輿みこしの中の恋しいお姿を想像して、いよいよ遠いはるかな、手の届きがたいお方になっておしまいになったと心に歎なげかれた。気が変になるほどであった。

つきもせぬ心の闇やみにくるるかな雲井に人を見るにつけても

こう思われて悲しいのである。

若宮のお顔は御生育あそばすにつれてますます源氏に似ておいきになった。だれもそうした秘密に気をつく者はないようである。

何をどう作り変えても源氏と同じ美貌びぼうを見うることはないわけであるが、この二人の皇子は月と日と同じ形で空にかかっているように似ておいでになると世人も思った。

（訳注） この巻も前二巻と同年の秋に始まって、源氏十九歳の秋までが書かれている。





# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 上巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年8月10日改版初版発行

1994（平成6）年12月20日56版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月5日71版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2003年7月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

紅葉賀

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>